

2025 東京大学（前期）国語（文科）概評

出題分析			
試験時間	150分	配点	120点
		大問数	4題（現代文2、古文1、漢文1）
分量（昨年比較）	[減少] 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化] [同程度] 難化]
<p><b>【概評】</b></p> <p>〈現代文〉</p> <p>第一問の文理共通問題は、本文の分量は昨年より約1000字減、設問の記述説明問題（120字記述を含む）4問と漢字の書き取りは昨年までと同じ構成。第四問の文科専用問題は、例年とは異なり小説が出題された。本文の分量は約1000字増、設問数は例年と同じ4問。本文は概ね読みやすいが、答えを簡潔かつ明快にまとめる力が問われる。</p> <p>〈古文〉</p> <p>本文の分量は昨年より240字程度の減少。本年度は、一昨年度の『沙石集』と同様に、中世に成立した仏教説話集『撰集抄』から出題された。例年通り設問数5問・解答欄各1行で、本年度は、簡潔・明快な表現力に加え、文化に対する深い理解も求められた。また、和歌も文科・理科共通問題で問われた。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>本文の分量は222字で、昨年より8字増加。設問数は昨年と同じ4問。昨年出題されなかった長い現代語訳が復活し、短い現代語訳・長い現代語訳・説明問題で構成されていた。例年通り、漢字の正しい理解をもとに、解答を過不足なくまとめる高い表現力が求められた。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文（評論） 田中彰吾『身体と魂の思想史——「大きな理性」の行方』	乳児が鏡に映る身体を「自己」と認知できるためには、他者の視点から見た自己に気づくことが必要であり、自己の身体イメージには他者が不可欠であることを述べた文章。本文は読みやすいが、本文の段落構成や論旨に即して説明すべきことを明確にまとめる力が問われる。内容説明（どういうことか）1問、理由説明（なぜか）3問、漢字1問（解答数3）の構成。	やや易

設問別講評			
二	古文（説話） 『撰集抄』	隆明法印の許に物乞いに來た僧は、なんと高僧の誉れ高き清水寺の宝日上人であった。本文は、その奇異なまでに陰徳を貫く姿が描かれている。解答をまとめる上で、仏教文化に対する深い理解、及び出題意図の正確な把握が鍵になる。現代語訳1問（解答数3）、内容説明2問、理由説明1問、和歌の大意1問の構成。	難
三	漢文（随筆） 雲棲株宏『竹窓二筆』	人は執着を憂えるが、物事を極めるためには、対象を大いに好む「着」が不可欠であることを述べた文章。本文全体の趣旨を踏まえ、適切な訳語を見極める必要がある。語句の現代語訳1問（解答数3）、指示語を含む現代語訳1問、内容説明2問の構成。	やや難
四	現代文（小説） 佐多稲子「狭い庭」	夫妻の家に入り出ていた植木屋と疎遠になった経緯を語り、姿を現わさなくなった植木屋に思いを巡らせる文章。本文を踏まえ、登場人物の心情を的確に言語化していく表現力が問われる。理由説明（なぜか）2問、内容説明（どのようなことがうかがわれるか）1問、心情説明1問の構成。	標準

合格のための学習法

〈現代文〉

本文の構成を意識しながら文章を読み解き、書くべきポイントを把握した上で、傍線部の表現（指示語、比喩など）に留意しつつ答案を作成することが求められる。限られたスペース内に簡潔にまとめる練習や、本文全体を踏まえた120字程度の要約を習慣的に行うことが有効である。

〈古文〉

本年度は中世の仏教説話集『撰集抄』からの出題で、比較的読みやすい文章ではあったが、解答を作成する上で、基本単語・文法に基づく逐語訳は必要条件にすぎない。省略や指示語の内容、人物関係を補った解釈文を作れるのはもちろん、多くの滋味深い文章に触れて、古典文化への理解も深めたい。和歌に関しても、種々の技法を学ぶとともに、本文との対応を捉えて精細に解釈する訓練を積もう。

〈漢文〉

本文の論旨は比較的把握しやすいものが多い。ただし漢文の語句や句法に関する正確な知識がなければ、論述の要所を誤読しかねず、また限られた字数で文意が正しく伝わる解答を作成することは難しい。基礎知識の暗記に終始せず、日頃から漢字一字一字の意味に注意を払い、本文全体を自分の言葉で解釈する訓練を積むことで、確かな読解力・表現力を養おう。